

アメリカにおける LARA 救援活動の組織化及び運営と平和活動の同期化

—Clarence Pickett の軌跡を軸とした考察—

○ 立教大学 西田 恵子 (会員番号 1970)

呉 世雄 (立命館大学・会員番号 8042)

キーワード：LARA 救援活動 運営

1. 研究目的

第2次世界大戦後、日本へ送られたララ物資の意義について社会福祉の領域で明らかにすることが研究全体の目的である。ララ物資とは、第2次世界大戦後、1946年11月から1952年6月まで、日本と韓国へアメリカの民間団体 Licensed Agencies for Relief in Asia (通称 LARA、以下「LARA」という。)が送った救援物資のことである。日本に対しては全期間で食糧・衣服・医薬品・靴・石鹼・布地・綿など総量約約 15,000 トン、当時の金額にして 1,100 万ドル (日本円で 400 億円) に相当する量が送られた。日本においては厚生省が窓口となり、都道府県の福祉所管部局を通じて福祉施設、医療機関、戦災者引揚寮などを利用する要援護者へ配分された。当時の日本国民の多くは対戦国であるアメリカから物資が送られてきたことを驚くとともに日本と異なる物資の豊かさや他国への救援活動を知る機会となった。1952年に厚生省が発行した『ララ記念誌』では「ララの発端」について、「多くの外人に尋ねたところだが、皆云い合したように『いつどうして始まったか、どうもハッキリしません』と明答をしぶる。しぶるのではなく、出来ないらしい。それ位ララの発端はハッキリしていないのである。」(1952、19)と記しており、以降、ララの発足経過は不明であるというのが通説となった。このことについて多々良紀夫はアメリカで調査し、その組織基盤を明らかにするとともに、LARAの母体組織である民間組織の ACVAFS は LARA を日本だけでなく韓国を救援すること目的としていたこと、LARA に先行してドイツで LARA と同様の救援活動を展開していたことを明らかにした(1999、2)。だが、その後、多々良は高齢者虐待等、他の研究課題に力を注ぎ、LARA の研究をさらに進めることのないまま 2012 年に急逝した。本研究は、多々良の研究成果をふまえた上で、社会福祉のマクロ環境を念頭に置いて LARA の組織化の過程と運営の実態についてより詳細に把握し、日本をはじめ各国で海外救援が必要な事態が生じた際に求められる円滑かつ効果的な運営の要件を明らかにすることを目指している。

2. 研究の視点および方法

研究課題の一つに救援活動を組織化したアメリカにおける LARA の運営の把握と分析がある。そのアプローチ方法は複数考えられるが、日本においてはララ中央委員会とララ三代表 (E. B. Rhoads、M. J. Mckillop、G. E. Bott) を中心にララ物資の運営を調整していたことを勘案し、アメリカにおけるキーパーソンの析出とその関与内容の把握を行うこととした。その成果によってアメリカと日本の関係者の応答関係を検討する基盤のひとつとする。

上記のため、①アメリカ国立公文書館（通称 NARA、以下「NARA」という。）（2015年10月）、LARA 構成団体の②アメリカフレンズ奉仕団（通称 AFSC、以下「AFSC」という。）のアーカイブセンター（2023年11月、2024年3月）、③メノナイトのアーカイブセンター（2023年11月）での各種文書等の閲覧と撮影、文書の精読及び検討を方法として採用した。

3. 倫理的配慮

日本社会福祉学会研究倫理規程を遵守している。文献、資料の引用にあたっては出典を明らかにし、研究過程で証言を得る際には、協力者の名誉やプライバシー等の人権を侵害することがないように十分な配慮を行っている。COI(利益相反)の無い研究であることも確認している。

4. 研究結果

LARA の母体組織は ACVAFS である。しかし NARA に保管されている ACVAFS の文書は膨大であるため、LARA を中心に閲覧することとした。ララ三代表の E. B. Rhoads は AFSC、M. J. Mckillop はカトリック奉仕団、G. E. Bott は教会世界奉仕団に所属していた。各種文書を照会する過程で、この3つの団体のうち AFSC の文書の量が圧倒的に多い状況にあった。また、AFSC のアーカイブセンターには LARA はもとよりドイツにおける救援活動の文書も相当の量が保管されていた。そこで AFSC の文書を順次、閲覧していくと、E. B. Rhoads の文書があるとともに、Clarence Pickett (1884-1965) のサインが入った文書が多くあることを把握した。その中には彼と E. B. Rhoads とで交わした文書もある。これらを通じてアメリカにおける LARA の組織化と運営のキーパーソンの一人は Clarence Pickett であると判断し、各種文書の読解と検討を進めることと並行して、これまで把握してこなかった Clarence Pickett という人物の海外救援活動に関わる資料の収集に努めることとした。『WITNESS FOR HUMANITY』と『FOR MORE THAN BREAD』は彼を詳述した文献である。Clarence Pickett は1884年にイリノイ州に生まれ、その後、いくつかの経歴の後、AFSC の事務局長を務めた。LARA などの活動はまさに彼が AFSC に在職した時期に重なる。彼は日本等現地からのレポートや文書を通じて救援の進捗状況を把握するとともに、活動展開のための問いかけや意見を継続的に発信している。このことはメノナイトアーカイブセンターの文書からも把握することができた。

5. 考察

アメリカにおける LARA のキーパーソンの一人として Clarence Pickett を析出した。彼は LARA を構成する諸団体やメンバーと合意形成をはかりながら、敗戦国の要援護者支援として救援物資を送ることを進めた。彼は LARA をはじめとする海外救援活動だけでなく人種問題活動、核兵器反対運動などにも関与した。LARA の一連の活動は人権尊重と平和の希求の活動と軌を一にすると考えることができる。彼はフーバー、ルーズベルト、トルーマン、ケネディ大統領の顧問を務めるなど政治領域へも関与した。AFSC がノーベル平和賞を受賞（1947）した折には事務局長として受け取った。戦争を背景として社会福祉の運営が困難な状況に陥る危機下では、その救援活動に平和活動は接続し同期化すると考えることができる。2024年現在、その構造と運営を一層、研究する意義がある。 [本研究は JSPS 科研費 23KK0036 の助成を受けています.]